

# しろくまのかんじの話

## 序文 小学生のみなさんへ

みなさん、こんにちば。しろくまです。みなさん、漢字のお勉強していますか？ 入試でも、漢字の書きとり、はたいせつですよ。しっかり勉強してくださいね。きつとお母さんやお父さんも、みなさんに漢字の読み・書き、教えてくださっていると思いますが、ちょっと休けいおのときにも読んでください。漢字が好きになってくれたらうれしいです。

## 第一章

漢字は、もともと日本の文字ではありません。というか、日本には文字がなかったんですよ。今から1500年いじょうも前に、朝鮮半島から日本にやってきた人が来て伝えてくれました。伝わったときは、おかしの人たちも、きつと、便利だなあ、と思うだけでなくて、みなさんと同じように、たくさんあっておぼえるの、たいへんだ、と思っただけです。いろいろの文字がたわわって、最初にむかしの人が思っただけは、これ、何のことだろう？ だっただけです。たとえば「犬」という漢字… みなさんは読めますよね。でも、昔の人は、最初は知りませんでした。きつと、伝えてくれた人が

「これは… ほら、あそこでワンワンないている動物のことやで〜」  
と、教えてくれたかも知れません。それで

「あ、この『犬』という字は、『いぬ』のことなんだな」

となつて、じゃあ、この「犬」は「いぬ」と読んでしまえつとなつたわけですよ。

「ところで、あなたの国では何と読むんですか？」

「『犬』は『ケン』と読みますね」

みたいな会話があつたのかも知れません。もちろん、そのときは「ケン」とは読まなかつたのでしようが、むかしの人にはそう聞かえたくも知れませんが、ながい時間をかけた伝言ゲームみたいで、使っているうちに、日本人にも言いやすいことばで『ケン』になつちやつたのでしよう。

「犬」を「ケン」と読むのが「おんよみ」、「犬」を「いぬ」と読むのが「くんよみ」となりました。同じように「花」という漢字。中国のことばでは「ファ」と読むみたいですが、使っているうちに日本人の人でも発音しやすく「カ」になつて、これが「花」の「おんよみ」になりました。で、これは、日本では、「はな」のことだな、となつて、じゃあこの「花」は「はな」と読もう、となつて、これが「花」の「くんよみ」になつたのです。かんがえてみたら、むかしの人はずいことしたんですよ。もともと外国の文字を「二つの読み方」しちやつたのですから。みなさんにはむずかしい話をしますと、英語で、「犬」はdogです。この文字をみて、dogの「おんよみ」は「ドッグ」、「くんよみ」は「いぬ」と、きめたのと同じなんですからね〜

さて、こまつたこともありました。もともと日本に無いものは、「くんよみ」できませんよね。たとえば「馬」。もともとこの動物は日本にはいませんでした。「馬」は中国のことばで「マ」&quot;と読みました。「おんよみ」は「マ」でよきですよ。みなさん、「マ」と口で音を出すとき、上のくちびると、下のくちびるがくつきますよね。それで長くゆっくり音を出すと「うま」となりませんか？ そうして使っているうちに、「ま」が「うま」になつて、「うま」となつたんです。同じように「梅」もそうなんです。中国のことばでは「メイ」と読みました。「馬」と同じように、上のくちびると下のくちびるがくつについて、長くゆっくり音を出すと「うめい」になつて、「うめい」、「うめ」となつたんです。こんなこと、学校の先生に言うたらわられますけど、「馬」の読み方「うま」と「梅」の読み方「うめ」は、じつは「おんよみ」と言うべきかもしれないですよ〜

みなさんが「くんよみ」と思っているものが、「おんよみ」のものもたくさんあるのです。たとえば「茶」。「おんよみ」は「サ」で「くんよみ」は「チャ」と思っていますか？「茶」は中国のことばで「チャ」と読みます。もともと日本に無いものですから、これはそのまま「チャ」となりました。ですから「チャ」は「おんよみ」なのです。もともと「茶」がなかつたのはヨーロッパでも同じです。「茶」は英語で「ティー」ですが、これも「チャ」という音からきている、という話もあるくらいなんです。ほかに、みなさんが「くんよみ」と思っている「おんよみ」の文字を教えますと、びっくりする人もいるかと思いますが「肉」の「にく」は「くんよみ」ではなく「おんよみ」ですよ。え？ じゃあ「肉」の「くんよみ」は何？？ と思つてしようが、「くんよみ」はありません。というか、むかしはありまし

た。古いことばでは「肉」は「しし」と読んだんです。お花の「菊」。これも「きく」は「くんよみ」と思っている人いませんか？これは「おんよみ」なんですよ。「点」は「テン」で「おんよみ」、「死」は「シ」で「おんよみ」。どうですか？ みなさんも漢和辞典をよんで、いろいろしらべてみませんか？

では「くんよみ」は??? 「点」の「くんよみ」は、お茶を「点てる」で「たてる」、「死」の「くんよみ」は「死ぬ」で「しぬ」… え??? だったら「死」は「し」も「くんよみ」ではないの??? と思うでしょうが、漢和辞典では一文字の場合は「シ」で「おんよみ」にしているのです。

## 第二章

漢字は、もともとは中国でうまれました。うらないにつかっていた亀(かめ)の甲羅(こうら)や、鹿(しか)の骨(ほね)に、きざまれたものから、だんだん今のようなものに変わっていったんです。さいしょ、発見されたところはどこだったか知っていますか？ お薬屋さんだったんですよ。甲羅や骨に、なにやらふしぎなものがきざまれている… きっとこれには何かすごい力があるにちがいない… で、甲羅や骨を粉にしてのおと効き目があるにちがいないと、むかしの人は思ったみたいですよ。それをヨーロッパのえらい学者が、「これはむかしの人のつかっていた文字とちゃうん?!」となって発見されました。

これらの多くは象形(しょうけい)文字といって、あるモノの形をかたどって字にしたものでした。たとえば「山」「川」「木」なんかはじっさいの山や川や木の目で見たようすを形にしてつくられました。「魚」なんかもそうですね。よ。「田」の部分(うろこ)がウロコなんでしょうね。「灬」(ひ)の四つの点々は「しっぽ」、尾(お)ひれをしめしているそうです。やがて、人びとの生活(せい)がゆたかになって、いろいろな活動(かつどう)をするようになる、文字もしだいに増(ふ)えて、ふくざつになっていきました。つかいやすいように、わかりやすいように、くみあわされるようになっていたのです。木+木=林、木+木+木=森、みたいに、文字も成長(せい)していきました。「木」のおこ(こ)うに太陽「日」がのぼってきて、「木+日=東」になった、というお話(お話し)も聞いたことはありませんか？

漢字のテストなんかで、みなさんが、よくまちがえてしまうところは、じつは漢字(かんじ)のもつ便利(べんり)さの部分、わかりやすくするためのくみあわせの部分にあるのですよ。その便利(べんり)さ、わかりやす(やす)さを知らないでおぼえようとしちゃうからまちがいやすいのです。

象形文字(じょうけい)のほかに、形声(けいせい)文字(ぶんじ)というのがあります。テストでもっともよく出るのが、この文字(ぶんじ)なんです。形(かたち)+声(こゑ)の文字(ぶんじ)です。文字(ぶんじ)の中に意味(いみ)をあらわす部分(ぶぶん)と音(おと)をあらわす部分(ぶぶん)があります。部首(ぶしゅ)ということばを聞いたことはないですか？ 部首(ぶしゅ)は「意味(いみ)」をあらわすもので、形声文字(けいせい)の「形(かたち)」のところ(ところ)です。たとえば「検」「険」「剣」の「おんよみ」はみんな「ケン」です。どうでしょう? どこの部分(ぶぶん)が「ケン」という音(おと)を出しているかわかりませんか? 「木」「阝」「イ」「亅」は音(おと)を出しません。これらを「へん」といいます。

そして「意味(いみ)」をしめしているところ(ところ)です。せっかく漢字(かんじ)さんたちが、わたしは意味(いみ)だよ、わたしは音(おと)だよ、と言うてくれているのに、それを無視(むし)しておぼえるからまちがえるのですよ。よく漢字(かんじ)さんたちを見てあげてくださいね。

さて、「ケン」という音(おと)は、もともと中国(ちゅうごく)ではどのような音(おと)だったのかはしりませんが、「ぎゅ」とあつめる、しぼる」という音(おと)だそう(そう)です。そうかんがえると、これらの漢字(かんじ)の意味(いみ)がさらにハッキリします。むかしは、紙(かみ)が発明(はつめい)されていなかったり、発明(はつめい)されたあと(あと)でもしぼる(しぼる)は貴重(きちゆう)きなもの(もの)だったので、文字(ぶんじ)は木(き)や竹(たけ)にしている(して)いたのです。ですから「検」という字(じ)は、「木」に記(し)されたもの(もの)を「あつめてくる」という意味(いみ)で、「しらべる」という意味(いみ)になりました。ついでにいうと、「名簿(めいぼ)」の「簿」は「竹(たけ)かんむり」でしょ? 「竹」にむかしは文字(ぶんじ)を書いて記録(きろく)していたから(から)ですよ。草(くさ)には書(か)かないから「くさかんむり」じゃないのだ、とわかるのです。「阝」は「こぎとへん」で、これは「丘(おか)」など(など)な(な)ら(ら)かな(かな)山(やま)を(を)しめ(しめ)す(す)もの(もの)です。これが「ぎゅ」としぼられて「けわしく」なりました。ということ(こと)で「険」になる(なる)のです。ですから、「たんけん」という字(じ)は「探検」と「探険」の二つ(ふたつ)がある(ある)のですが、「しらべるぞ」という気持(きもち)が強い(強い)と「探検」に、「けわしいところ(ところ)をふみこえていくぞ」というチャレンジ(チャレンジ)の気持(きもち)が強い(強い)と「探険」になる(なる)ので、使い(つか)い方(かた)で(で)どっち(どっち)も正解(せいけい)です。じっさい、入試(いりし)に(に)ゅう(ゆう)し(し)で、この文章(ぶんしょう)で(で)ど(ど)ち(ち)ら(ら)の「たんけん」を(を)使う(つか)う(う)の(の)が(が)ふ(ふ)さ(さ)わ(わ)しい(しい)です(す)か、という問題(もんだい)が出(で)た(た)こと(こと)も(も)あ(あ)る(る)の(の)です(す)よ。「イ」は「にんべん」で、「人(ひと)」です。これは小学生(しょうがくせい)ではあまり(あまり)習(な)わ(わ)ない(ない)字(じ)ですが、「検」は「人が(ひと)ひ(ひ)き(き)し(し)め(め)ら(ら)れ(れ)て(て)い(い)る(る)」イメ(イ)ージ(ージ)に(に)なり(なり)ます。「検約(けんやく)」という(いう)のは、む(む)だ(だ)を(を)なく(なく)して「ひ(ひ)き(き)し(し)め(め)る(る)」わけ(わけ)です(す)から、この(この)字(じ)を(を)使う(つか)う(う)の(の)です(す)よね。「亅」は「りっとう」で、「刀(かたな)」を(を)意味(いみ)する(する)もの(もの)です。む(む)か(か)し(し)の(の)中(ちゅう)国(こく)の(の)刀(は)は(は)い(い)ろ(ろ)い(い)ろ(ろ)な(な)種(しゅ)類(るい)(が)あ(あ)り(り)ま(ま)した(した)。その(その)中(ちゅう)で(で)も、細(こ)身(み)ほ(ほ)そ(そ)み(み)の(の)、「ぎゅ(ぎゅ)っ(っ)と(と)し(し)ぼ(ぼ)ら(ら)れた(た)刀(は)」は「剣」

になるわけです。

漢字などの語句(ことば)を入試に出す私立中学の問題では、こういう部首についてのものもけっこうあります。部首は何ですか？ みたいな問題です。「問」「聞」「関」「開」「閉」さてさて、これらはすべて「門(もんがまえ)」ではないですよ！「おんよみ」すると「モン」「ブン(モン)」「カン」「カイ」「ヘイ」ですよ。しつてましたか？

**ポイント**

発音して「モン」になるのは「もんがまえ」ではない！

つまり、「意味」があるものが部首なんですよ。「問」は「口(くち)」ですし、「聞」は「耳(みみ)」です。この二つは「もんがまえ」の文字ではありません。意味が強いほうが、部首になります。さてさて、そうすると、まぎらわしいものもあります。「利」という字です。「禾(のぎへん)は「いね」「みのり」をあらわすものです。「稻(いね)」「穂(ほ)などはみな「のぎへん」です。「リ」はさっき話したように「かたな」を意味しています。そう考えると「利」はどちらでもいけそうです。「利益(りえき)」とかがえると「みのり」だから「のぎへん」でもよさそうだし、「鋭利(えいり)」とかがえると「するどい」だから「りつとう」でもよさそうだし…「禾」、つまり「いね」を「刃」で、かりとったところからきた文字なのです。成り立ちからいえばどちらでもよさそうですが、「きり」とらないともうけにない」わけですから、現在では、「利」の部首は「りつとう」にしています。さてさて、こんな感じで、テストによく出るものも、わかりやすくまとめていきたいと思います。

### 第三章

部首の話をしながら、漢字の書きとりなどでまちがいやすいところをまとめていきますね。たとえばみなさんは、「ぶしゅ」があるのかないのか、まよったことはありませんか？ あれも、部首とか「へん」「つくり」を知っているとまちがわないものがあるのですよ。

そういう例をあげてみると…

「博」「薄」「簿」など、これらはすべて「、」があります。これらの字の「甫」という部分はこれでひとつなのを知っていましたか？「ホ・フ・はじめ」というものです。ですから、筆順(ひつじゅん)も、これらの字は、最後に「、」ではないのです。おとなでもまちがえて、最後に「、」でおわってしまう人いるんですよ。みんなのお父さんやお母さんはいじょうぶかな？おかしは、中学入試でも「筆順」がよく出題されました。いまでも、たまくに出るときもあるので、これらは知っていたほうがよいかもです。「博」は「十」+「甫」+「寸」のじゅんばんに書かなくてはいけません。で、「甫」が「音」をあらわす部分です。もともと「フ・ホ」などハ行の音になるもので「ハク」というよみもします。さて、「専門」の「専」。これって「博」の右側と、よくにているから「、」があるのでは？ と思うとおおまちがい！ 「恵」という字にも「、」はありません。なぜか？

**ポイント**

「おんよみ」してハ行(バ行)にならないなら、「甫」という字をふくまないで「、」がない。

「甫」という字が入っていたら、「ホ・フ・ハク」と発音できるのですが、この字がなかったら、「ホ」「フ」「ハク」と発音できません。「専門」の「専」はおんよみしたら「セン」。ハ行ではありません。「恵」という字のおんよみは「ケイ」。ハ行ではありません。「甫」という字をもっていないのです。ですから「専」も「恵」も点はないのです。ちょっとまってよ、しろくまさん！ 「穂」は「ほ」だから「、」があるのでは？？

ざんねんでした！

「穂」の「ほ」は「くんよみ」です。この字の「おんよみ」は「スイ」。「甫」という字をふくんでいないのです。ですから点をつけてはいけません！

### 第四章

ちょっとあわてて、さきに話がすすみすぎたので、もう少しいねいに説明していきたいと思います。漢字は、ほんとうにいろいろな部品からできています。その部品が「へん」とか「つくり」とか「かんむり」とかよばれるものです。いっけん、おぼろかしそうなものでも、バラバラにしたら、わりとわかりやすくなりますよ。まえに「簿」とい

う字のことを話しましたよね。これも「竹」＋「シ」＋「甫」＋「寸」ですよね。「たけかんむり」「さんずいへん」「はじめ」「すん」からつくられています。どうでしょう、みなさんも、漢字をおぼえるときに、学校の先生から10回かきなさい、20回かきなさい、おぼえるまでノートいっぱいかきなさいっとかいわれたことはありませんか？「簿・簿・簿・簿・簿・簿……」とか、かいていたらつかれてきますよね。でもね、漢字をしっかりとおぼえよう、というときは、部品ごとに10回ずつかいたほうが、まちがえにくく、しっかりとおぼえられるですよ。さきに「竹・竹・竹……」つぎに「シ・シ・シ……」つぎに「甫・甫・甫……」つぎに「寸・寸・寸……」とたしていく、というやり方のほうがよいのです。なり立ちもわかるし、「、」があるかないかも、しっかりとおぼえられるし……こんどから、漢字をおぼえるときに、ためしてみてください。

さて、「部首」(ぶしゅ)の話をしていきたいと思えます。部首は漢和辞典(かんわじてん)で漢字をしらべるとき、その手がかりとする漢字の一部のことで、漢字によって部首は何かきめられているのです。むかし、中国に「清(しん)」という国があって、その皇帝(こうてい)が、それまでつくられて使われてきた漢字をまとめて辞典をつくったのですが、いまでも、それにしたがって、辞典がまとめられています。しろくまが、むかし、塾(じゅく)で先生をしていたとき、漢字のさいしょの講義(こうぎ)のときに、ちょっといじわるな質問(しつもん)をしました。黒板に

「魚」「骨」「裏」「問」「酒」

という5つの漢字をかいて、部首は何かわかるかな？と、たずねたのです。漢字がとくいたよ、と知っている人でも、けっこうひっかかってくれました。ついつい「𩺰」(れんが)とこたえてしまう人がいるんです。「𩺰」は「火」をあらわすものです。「魚」の部首が「れんが」なら、「焼(や)き魚」になっちゃいますよ。いじわるですが、「魚」はこれだけで「うお」という部首なんです。「骨」は「ほね」とよみます。「月」があるから「にくづき」、と、こたえてはいけません。「骨」もこれだけで「ほね」という部首なんです。

**ポイント**

体の一部をあらわすものは、それだけで一つの部首になるものがおおい。

だから、まえにも言ったように「問」は「もんがまえ」ではなくて「口」、「くち」が部首になるのです。「聞」も「耳」が部首です。「裏」もよくまちがえて、「エ」(なべぶた)と答えてしまいましたが、ちがいます。「裏」(うら)の音読みはわかりますか？「リ」ですよね。

**ポイント**

音をあらわす部分ではないところが部首である。

「裏」という字をみてください。「リ」という発音はどこにあるか……「里」ですよ。つまり！「裏」里「衣」でしょ？「裏」の部首は「ころも」なのです。

むかし、部首は、けっこうどこにつけてもよい、というテキストな時代がありました。みなさんは歴史で空海というえらいおぼうさまが「金剛峰寺」というお寺をたてた、と習(なら)ったことはないですか？「峰」という字は「山」が部首ですから、「かんむり」にしちゃって「峯」でもよいのです。金剛峰寺は正しくは金剛峯寺と書くそうですよ。ですから、「裏」も、「衣」と「里」に分解(ぶんかい)しちゃって「ころもへん」と「里」で「裡」という字にしてもよいのです。

「酒」ですけれど、これも「シ」(さんずい)と思うでしょ？「シ」(さんずい)は水に関係(かんけい)がふかい字に使う、と、ならったことはないですか？でも、「酒」は「酉」が部首なんです……え、そんな、どうやって見分けたらいいのよ？安心してください。めちゃくちゃたくさんある「シ」の字で、部首が「さんずいへん」でないのは、たったの二つだけ！「酒」と「鴻」だけ。これらの部首は「酉」と「鳥」。しかも「鴻」なんて字は小学生では習わないので、

**ポイント**

「酒」は「さんずいへん」が部首じゃない！

と、だけ、おぼえておけばOKです。

ところで「酉」という字ですが、これは「とり」と読みます。十二支(じゅうにし)の「とり年」は「酉年」と書きます。灘中学の入試は、その年の「干支(えと)」に関係(かんけい)のふかい問題(もんだい)が出されるのをしていますか？

「とり年」のとき、「酉」という字を、よくむ漢字を書きなさい、という問題(もんだい)が出たことがあります。みなさんは、いくつ書けますか？「酒」以外(ほか)にいろいろさがしてみてくださいね。

漢字の書きとりのまちがいて、いろいろありますよね。「」があったりなかったり、部首をまちがえたり、そして、おなじ読みをして字がちがうものを書きまちがえたり…そのまちがいをしめないポイント、やっぱり部首にあると思うのです。しるくまが学生時代、家庭教師(かていきょうし)をしたことがありました。そしてお月謝(げっしや)をもらったときに、ふうとうの上に「お札」と書いてありました…「お、おさつ…」 た、たしかにお札は入っています…「木(きへん)ではなく、「ネ」(しめすへん)のおつもりで書かれたのでしょうか。みなさんも部首のかきまちがえ、というのをしたことはありませんか？

「ネ」と「」(ころもへん)のまちがいをよくしてしまうものです。「ネ」は「示」という字をりやくしたものです。これは「神さまの声」、「神さまが何かをおしらせくださる」という意味をしめています。「はつきりする」「しめす」という意味もあります。ですから、「礼」など人がひざまづいている1文字がついている、という説もあります。「祈」「社」「祝」「祖」などは「示」なのですよ。ね。「祝(いわ)います」と手紙に書くときは注意してね。うっかり「口」にすると、「呪(のろ)います」になっちゃいますからね。「おまえを祝ってやるっ！」とか、こわい顔して言われても「え… あ、ありがとう…」となっちゃいますからね。

「衣」は、へんにする場合、「衣」となります。これは、そのまま「衣」の意味。それだけではなく、くだものの皮(かわ)の意味もあり、そこから、「つつむ」、そして「かさなっている」、上から「かぶせる」意味も出てきます。「袖(そで)」はわかりやすい例(れい)ですよ。ね。ふくの一部。「表」もですから「衣」になります。そのはんたいの「裏」もそうでしたよね。「ころも」を切るのは「裁(た)つ」、「裁」も「衣」です。「木」を切ったら「栽培(さいばい)」の「裁」になるわけです。「装」も「よそおい」で「衣」ですが、「つつむ」と「かぶせる」で「包装(ほうそう)」になるわけです。「製品」の「製」も「衣」。これはもともと、つくった品物を、きっちりつつんで、はい、できました、という意味でした。さて、この二つで注意があります。

### ポイント

「視」の部首は「見」。

### ポイント

「初」の部首は「刀」。

「しめすへん」「ころもへん」ではない例です。

## 第六章

「魚」は「灬(れんが)じゃないよ、注意してね、といいましたよね。もともと「れんが」は「火」をあらわしています。「魚」は象形文字だから、「れんが」ではありません。ですから、「火」と関わり合いが深いものが「灬」です。下から火であぶっているみたいなんじゃないですよ。ね。「灰」なども「尸」ではなくて「火」が部首です。「炭」も「火」です。「点」は、お茶を「点(た)てる」ですから、「灬」です。ちょっとためらいがあるかもしれませんが「無」も「灬」です。みなさんが使うような字で「灬」「火」ではないものは

### ポイント

「黒」は「灬」ではなく「黒」、「畑」は「火」ではなくて「田」

となります。小学生では習わない「黙(だま)る」も「黒」が部首なんですよ。ね。これって「黒犬」って書いてあるんです。

さて、漢字はいろいろな組み合わせでできているといいました。「蒸」という字があります。書きとりのテストではよく出題されるものです。この字の画数(かくすう)はわかりますか？ 13画なんです。13画で書けますか？ くんよみすると「蒸(む)す」ですよ。ね。これは、いれものに「水」を入れて、上に「くさかんむり」でフタをして、下から「灬」火であぶる、という字になっているのがわかりますか？ まんなかの「水」を意識して書く人が、おとんでもなくなくて、「氷」(5画)こんな字にってしまう人いるんですよ。字のなりたちを知っていると、書きまちがいをしませんよ。

「蒸」は「くさかんむり」+「フ」+「水」(4画)+「一」+「灬」となるわけです。

あ、この「蒸」の部首は「くさかんむり」ですよ。入試でも、この字がよく出て、画数を聞かれたり、書きとりに出されたりするのは、「水」をわかっているかどうかをたずねたいのです。ですからこの部分をいいかげんに書いていると×にされちゃいます。水を入れて、フタして、火にかけないと「蒸(む)」せませんよ。

## 第七章

漢字を書くときにはいちおう、書くための順番がきめられています。書けたらなんでもよいやん、と思う人たちも

いるかと思いますが、とりあえず、原則をきめておこう、というわけです。でもそれなりに理由があったりして、漢字を知る手がかりにもなります。さいきんは、入試ではあまり出なくなりりましたが、それでもときどき出題（しゅつだい）される場合がありますから、大切なことだけはおぼえておきましょうね。

みんなが塾でならったことや、参考書（さんこうしょ）に書かれているところに「原則（げんそく）」ってありませんか？ ふつうはこういう書き方をするよっていうルールのことです。

上から下へ、左から右へ、の二つが大原則です。

「三」はもちろん「工」「言」「喜」など、上から下へ書いていきますよね。「川」はもちろん、「休」とか「竹」とか左から右へ書いていきますよね。ふつうは「へん」が先で「つくり」が後です。三つの部分から成り立っているものも、左から右へ書きますよね。「例」という字なんかそうです。いろいろな原則がありますが、入試では、原則よりも例外がよく出題されます。ですから、いっそ例外の漢字をおぼえたほうが、よいのかもしれない。たとえば、「横が先」の原則があります。「十」なんかは「一」書いてから「一」で「十」にします。ところがこれをおぼえちゃうと、失敗するものもあります。「田」の筆順はわかりますか？

**まちがい**

「日」書いて「一」を入れて「田」にする

十ではなく、「一」書いてから「一」で、最後に底の「一」でふたをする順番で「田」なのです。「かまえ」＋「一」＋「一」＋「底の一」の順番です。

同じように「自由」の「由」も「日」に、つきぬけて「一」入れて「由」にしてはいけません。「一」「一」で「十」にするのではなく、「一」書いてから「一」、タテヨコ、にしなくてはいけません。「かまえ」＋「一」＋「一」＋「底の一」という順番です。「王」も同じです。「三」に「一」にして「王」はまちがい。「一」＋「一」で、ヨコ・ヨコ、で「王」。ヨコ・タテ・ヨコ・ヨコというように「王」を書きます。「王」「田」「由」の三つは、入試でもよく筆順をきかれますから注意してね。かんたんなものほど注意です。

田由王  
田由王  
田由王  
田由王  
田由王

また、原則に「つらぬくタテは最後に書く」というのがありますが、つらぬかなければ最後にしないわけですよ。このことは「漢」の右側と「謹」の右側は、よくにているけど筆順がちがうのがわかりますか？

「謹」の右は「くさかんむり」＋口＋タテ＋ヨコ・ヨコ・ヨコ・ヨコになります。

「漢」の右は「くさかんむり」＋口＋ヨコ・ヨコ＋「人」にしなくてはいけません。

これらも入試でよく出ますよ。

原則とおりなのに、意外とそう書いていない場合もあります。左から右へ、が原則なのに、「耳」もヨコ・タテ・タテ・ヨコ・ヨコ・ヨコと書く人がいます。これはヨコ・タテ・ヨコ・ヨコ・ヨコ、で最後にいちばん右のタテ、です。それは知っているよっ。という人、「済」ってちゃんと書いていますか？ 「さんずい」＋「文」＋タテ・ヨコ・ヨコ、最後に一番右のタテ、なのを知っていましたか？「耳」と「済」もよく入試に出るものだからおぼえておきましょうね。「瓜」も左から右へ、が原則ですよ。まんなかを最後に書いてはいけません。

「帯」「飛」「発」「女」「世」「医」の六つの筆順をしらべてみてください。これらはよく出題されるものです。かくにんしておいてね。

## 第八章

漢字の読み方は、「おんよみ」と「くんよみ」があります。まえに、「おんよみ」はもともと中国などで使われていた発音が、日本で使われているうちに、だんだん使いやすい音にかわっていった、といいました。また「くんよみ」は、もともと日本にあったことばなどを漢字にあてはめたもの、ともいいました。「花」は「カ」と「はな」、「犬」は「ケン」と「いぬ」：漢字一つに一つずつ「読み」があったら、みんなもわりと楽におぼえられたのでしょうか、けっこういろいろあります。でも、これが漢字のおもしろいところですよ。人だって、まじめだ、と思っていた人が、じつは楽しい人だったり、ふざけている、と思っていた人が、すごくまじめだったりするでしょう？ 漢字にも、いろいろな性格（せいかく）があるんですよ。

多重人格な漢字をしようか試してみたいと思います。「北」っていう字、していますか？いやいや、しろくまさん、これは方角の「北」でしょう。「ホク」と「きた」、ほかに意味があるとは思わないよ、という人も多いかもしれません。熟語(じゆくご)ってわかりますか？二つ以上の漢字をつかって、何か意味をあらわしている漢字のくみあわせのことです。「北」が入った熟語で「敗北」って言葉がありますよね。知っていますか？「ハイボク」って読んで、意味は戦いなどに負けちゃうことです。なんで「北(きた)」なんでしょう？北にむかってにげちゃうのでしょうか？「北」という人は、二人の人が、背中(せなか)合わせにすわっていることを示した文字なのです。よく見てください。そんなふうにみえませんか？もともと、中国では、方角の基準(きじゆん)は、「南(みなみ)」にあります。おおむかしは、方位磁石(ほういじしゃく)を中国では「指南魚(しなんぎよ)」といいました。水に磁石を浮かべて、方向をしらべたからです。いまは、地図の上を北にするよ、というきまりごとがありますが、むかしはちがったんですね。だから、基準となる方向をしめす、教える、ということ「指南する」というようにもなりました。さてさて「北」です。南をむいて、背中合わせの反対側だから「北」という文字をつかったのです。「南の反対側だよ」という意味なんですよね。で、「敗北」です。なぜ「北」という字をつかうかわかりましたか？負けて、反対むいてにげていく、敵(てき)に背を向けてにげていく、という意味です。そもそも「背」という文字にも「北」が入っているのでしょうか？「月」は「にくづき」、つまり「体の一部」を示す部首ですから、「体の反対側」で「背」になるわけです。「背く」のよみは、わかりますか？「そむく」、後ろむいちゃう、というところから、「さからう」という意味になるのですよね。

西洋にもよく似た話があります。西洋の方角の基準はむかしは「東」でした。太陽が出てくる場所は基準にしやすい。「東」って「オリエン」という言葉であらわします。ほら、「オリエンテーリング」ってしたことありませんか？方位磁石と地図をもってきめられた場所をさがしてめぐっていく…また説明会のことを「オリエンテーション」って言うときがあるのを知りませんか？「指南」と同じ、「東をきめる」↓「方角をしめす」↓「方針を説明する」ということになるのです。

こんな感じで、いろいろ説明していきたいと思います。テストに出る、みんながまちがいやすい、よみにくい漢字も、漢字のいろいろな性格を知っていると、ちょっと楽しく親しみがもてるものになるかもですよ。

## 第九章

まずは、まぎらわしい書き取りの判別、初級からいきましよう。

「あたたかい」という漢字は書けますか？もちろん、これだけでは、どの「あたたかい」ですか？となるはずですよ。「暖かい」と「温かい」です。これはかんたん、これくらいの区別はできるよ、という人、たくさんいますよね。「あたたかいスープ」「あたたかい気候」など、どちらを使えばよいか、これくらいはわかりますよね。「心のこもった『あたたかい』プレゼント」とかなるとどちらでしょう。『あたたかい』風が吹いてきた』ならどうでしょう？

### 判別のポイント

まよったときは反対語を考えよう

「温」↑↓「冷」(涼)

「暖」↑↓「寒」

「つめたいヤツだなあ」という言い方しますよね。気持ち「温かい」の反対語として「冷たい」を使います。寒いヤツだ、とはいいませんよね。「温かいスープ」⇔「冷めたスープ」。反対語を考えると、どちらの漢字をあてはめたらよいかわかるものが多いのです。「あつい」も、小学生のみなさんなら「暑い」「熱い」「厚い」の三つを知っていないといけません。「あつい友情」というと、「熱い」も使えそうですが、「情」という文字の場合、「薄情(はくじょう)」という使い方をします。「薄い」の反対語は「厚い」。だから「あつい友情」は「厚い」が適した使い方になるわけです。

また、まぎらわしい書き取りでも初級のものとしては「つとめる」がありますよね。もう習った人もいるかな。「勤める」「努める」「務める」の三つがあります。「勤める」は、会社など仕事に関係するものですから、わりとみなさん正しく使ってくれます。「努める」は「努力」で、「務める」は「任務」や「義務」など、他の2字熟語を思い出すといけそうです。「努」か「務」か、まよったとき…

### 判別のポイント

「に」か「を」を上につけて考えよう

「解決』に』つとめる」

「議長』を』つとめる」  
「会社』に』つとめる」  
「に』は「勤める」か「努める」ですよね。  
「を』は「務める」です。

ですから、「案内」という場合、どっちにしよう、となりますが：

1. 「案内』を』つとめる」
2. 「案内』に』つとめる」

「を」か「に」で区別すればよいわけです。

1. は「案内を務めます」ですし、2. 「案内に努めます」となります。どうでしょう？ 同じような感じで、「看病」なんかも区別して使えますよね。「わたしが看病につとめます」「わたしが看病をつとめます」など、どちらがふさわしいか、いけるでしょうか？

## 第十章

さて、前にもいいましたように、漢字さんたちは、人と同じです。一人のときとだれかがいっしょにいるときは、性格や様子が変わったりもします。じっさいのテストでは、一人のときはこんなだけ、二人のときは変わります、みたいなところがねらわれるのです。あなたはこの人の、こんなところは知らないでしょうか？ と、問われているのです。

どうでしょう。次の漢字一字の「くんよみ」できますか？

「雨」 「風」 「手」 「酒」 「胸」 の五つです。

かんたんですよね。 「あめ」「かぜ」「て」「さけ」「むね」です。しろくまさん、あんまりばかにしないでよと、みなさんにおかれそうです。でもね、問題をつくる先生たちは、かんたんで、よみにくいところをうまくさがしてきて出題されるのですよ。見た目がむずかしいものはかえってよくおぼえられるのです。日ごろの話の中で、なにげなく使うものがわすれやすい…

さてさて、これらの五つは、他の文字と組み合わせると読みが変わる場合が多いものです。

「雨具」 「雨雲」 「風車」 「風上」 「手綱」 「胸元」 「胸毛」

どうでしょう。すべて読めますか？ 「あまぐ」「あまぐも」というように、ほかの字とくっつくとかわっちゃう例たちです。「あめ」が「あま」になりました。「かざぐるま」「かざかみ」も「かぜ」が「かざ」となります。「手綱」は「たづな」です。「手」が「た」になっちゃうのです。むかしの表現に「花を手折る」というのがありますが、「手折る」も「たおる」なんですよ。「むなもと」「むなげ」も「むね」が「むな」になるパターンです。

ぎやくに下にくっついてかわるものも紹介（しょうかい）しましょうね。次の一字の「おんよみ」はできますか？ 「穏」 「音」 「応」 「縁」 「位」 の五つ。

これまたしっているよと、いわれそうですが「オン」「オン」「オウ」「エン」「イ」です。でも、下に一文字つくると読みが変わる場合がある。

「安穩」 「観音」 「反応」 「因縁」 「三位一体」

「アンノン」「カンノン」「ハンノウ」「インネン」「サンミイタイ」というように「ノン」「ノン」「ノウ」「ネン」「ミン」

となってしまいます。

これは音のつらなりによって変化したもので、ローマ字で書くときと理由がわかりそうです。 on + on (安 + 穩) kon + on (観 + 音) han + ou (反 + 応) そうそう、カメラの会社の「キャンノン」って知ってますか？ ちょっとふるい話ですけど、昔は「観音カメラ」って名前の会社だったらしいですよ。Canon から Canon ってなったそうです。

このように、もともとの音が、ほかの文字や言葉の音のつらなりで変化している漢字は入試でたいへんねらわれやすいのです。「口調」も「くちよう」で、ふだんの「口」の音、「コウ」や「くち」とはちがうのです。どうでしょう？ これは読めますか？ 「目のあたり」「今日はほこりっぽくて、目のあたりがかゆい」というのなら「目」は「め」でよいですが「目のあたりにする」となると「まのあたりにする」と「ま」になります。帽子（ぼうし）なども、しっかりふかくかぶるときは「目深にかぶる」で「まぶかにかぶる」とよむのです。

かんたんな字ほど、要注意なんですよね。



## 第十一章

さて、みなさんも学校や塾でならう漢字の読みで、もう一つの字とくっついてほかの読み方にかわるものを、さらにいくつかしようかいたしますね。

作者の「意図」を考える

機械を「操作」する

「体裁」ばかり気にする

人の「気配」を感じる

古都の「風情」を味わう

どうでしょう。入試でもよくみかける二字熟語たちですよね。「いと」「そうさ」「ていさい」「けはい」「ふぜい」です。

「風情」は「風」と「情」が出会ってそれぞれちがう読みに変わりましたよね。「ふう・じょう」ではなく、「ふ・ぜい」となりました。

さて、「図」です。これは「ズ」と「ト」という二つの読み方があります。ふたつとも「おんよみ」なんですよ。社会のテストで、表やグラフの問題が出たとき、それをどこからもってきたかをしめすことを「出典」(しゅってん)というのですけれど、そこでときどき『日本国勢図会』って書いてあるのをしりませんか？この本は、くだものややさいがどれだけとれたとか、工業でどんなものがつくられたか数字やグラフや表でしめたものですが、「図会」は「ズエ」と読むのですよ。「ズカイ」じゃありません。「図」という文字は、もともとは「鄙」という領土(りょうど)をししめす漢字の略(りやく)からうまれたものです。ここからここまで線をひいて、そっちがあなた、こっちがぼくの土地だよ、という意味をもっています。ですから、とうぜん、そのとき、話し合いがおこなわれて、相談(そうだん)しますよね。「図」は「図る」と書いて「はかる」というくんよみがありますが、計画する、相談する、という意味が出てくるわけですよ。

さて、「図」を「ト」とよむ、ほかの熟語は何かありますか？「図書室」の「図書」は「ト・シヨ」ですよね。みなさんの学校にもありますね。これは「河図洛書」(カト・ラクシヨ)という四字熟語を略したものです。「河図」は川や自然のようすをしるした図で、「洛書」は町のような図を書いた本。いろいろ自然のようす、人のようすをしめした本をまとめてそういったんです。「作」と「体」。ふたつとも「にんべん」、「人」を意味するものであることはわかります。さて、今回はちょっと「にんべん」、「ひと」と漢字の関係を説明してみたいと思います。

## 第十二章

さて、「人」と漢字について、すこしくわしく話してみます。「人」って漢字は、人の形からつくられた象形(しょうけい)文字ですよ。で、この字、ほとんどの人が二本足を示している、と思っただけですが、じつはちがうのです。左は実は「手」を示しています。二本足で立っている、のほうがわかりやすいのにね。で、前に紹介(しょうかい)した「北」。よくみると人が背中あわせになっている字と言いましたよね。左の人を逆(さか)にむけるとうなるかわかりますか？「比」です。人が二人、ならんでいる…二人をならべて「くらべる」、という字になっているのですよ。このように、二つの文字を組み合わせて、意味のある字になっている文字を「会意文字」といいます。

「手」+「目」でわかるかな？ 「看」という字になるでしょう？「みる」だけではなく、ちゃんと「手」をつくさなくては「看病」にはならないのです。漢字の中には、気がつかないだけで、けっこう「人」が入っています。

まえに形声文字の話をしたのをおぼえていますか？音をあらわす部分と意味をあらわす部分がある…意味をあらわすのが部首ですよ。「貝」という字が入っているものは、「お金」に關係するものが多いのです。貯金の「貯」、購入の「購」、貨幣の「貨」、など、みなさんも「もつ」とほかにも知っているよ」というくらい、たくさんありますよね。むかしは「貝」がお金として使われていました。「貝」は「財」、「たから」を意味する部首ですよ。でね、「負」という字、「貝」が入っていますよね。くんよみすると「負ける」で「まける」、「負う」で「おう」。この「負」という字なんです。上に「ク」という字のっかっています。これね、よくみて、イメージをふくらませて見てください。左むいた人が腰(こし)を曲げて、手をあわせているものだ、というのがわかるでしょう？この字は、「貝」すなわち、宝と、人がお願いしている字ですよ。お金について、何かお願いしている…お金ちよーだいっというてい

るのかもしれませんが、お金に関してだれかにあやまっているのかもしれませんが… お金をあやまりながらさしたしている、というような絵でもあります。「負ける」のイメージが伝わりませんか？こういう字なのです。あ、意外とおっちゃんっ 100円かけてやっの「まける」は正しい使い方なのですよね、それからさらに、この腰を曲げた人の背中に「だから」をよいしょっとのせている、という意味も出てきます。だから背中にのせる、「負う」ということになるのです。なんせ背中にのっているのが「だから」です。大切なものをせおっている… 「責任を負う」なんて使い方にもひろがりがありました。

ちなみに「担（にな）う」の「担」は「担（かつ）ぐ」ともよみますが、これは、棒（ぼう）を肩にのせて、その棒の両端にもつをぶらさげる、という意味です。また「荷物」の「荷」は、背中ではなく肩にかつぐときにつかう文字です。負うは背中に、荷は肩に： ちゃんと「肩の荷をおろす」という表現もありますよね。意味がしっかりあつて言葉は使われているのですよ。

「作」と「体」の話にもどしましょう。二つとも「人」、「にんべん」です。「操作」のように「作」を「さ」と読むものはほかにあげられるかな？ 「動作」「作法」「作用」など、みんな「さ」ですよ、ちよつとレベルが高いけど、「作」の右側の字には「たちまち」という大きな変化をあらわす意味もあるのを知っていましたか？「色をなす」という言葉があります。「色を作（な）す」ってもともとは書きました。これは「顔色をかえて怒る」という意味です。顔色がたちまち変わりましたということなんですよね。

「体裁」のように「体」を「てい」と読むものはほかにあげられるかな？ 「世間体」って読めますか？ 「せけんてい」です。「世間体を気にする」なんていう使い方をする言葉です。「体」には「あらい」「そまつ」という意味もあるのを知っていましたか？ 「大体」は「だいたい」、「おおよそ」という意味になるのですよね。また「ありさま」も意味します。「球体」などはそんな使い方の一つです。

さて、インフルエンザで塾も学校も休み、何をしようかなあ、と思っているみなさん、しらくまテストをしませんか？

まずは漢字のテストから。次の問題を解いてみましょう。

- ① つぎのカタカナを漢字になおさない。
    - ① 光を窓から「ト」り入れる
    - ② しばらく席を「ハズ」す
    - ③ 雑草（ぎつそう）が「ハ」えてきた
    - ④ 一線から「シリゾ」く
    - ⑤ 「アツ」くお礼をもうしあげます
  - ② 次の（ ）にそれぞれ同じ漢字を入れると熟語が三つずつできます。共通した一字を書きなさい。
    - ① （ ）（ ）先・（ ）（ ）示・（ ）（ ）輪
    - ② （ ）（ ）紙・投（ ）（ ）（ ）話
    - ③ 野（ ）（ ）（ ）料・（ ）（ ）理
    - ④ （ ）（ ）日・今（ ）（ ）明（ ）（ ）
    - ⑤ 人（ ）（ ）（ ）問・体（ ）（ ）
- どうかな？ できたかな？ 答えは次回。

## 第十三章

さてさて、前回の書き取りの問題ですが、中学入試のお勉強をいっしょうけんめいしている人は全問正解ですよ。ね？ 「採（と）る」という字は、いろいろあります。光を「採り」入れるの「採る」は、ほかに「決を採ります」と、という多数決で手をあげるのにも使うのですよ。「新入社員をとる」も「採用する」わけですから「採る」になりますよね。

- ① 「とる」シリーズは入試でもよく出てきます。標本をとる

- ② 映画をトる
- ③ 虫をトる
- ④ 筆をトる

などはみな有名です。①採る・②撮る・③捕る・④執るですよ。

漢字には「常用（じょうよう）漢字」と「常用外漢字」があります。「とる」にも「常用外」があって、「録る」「獲る」「撰る」は常用外。でも、しろくまは常用外の漢字さんたちも大好きです。だって言葉の意味をくわしく伝えてくれるからです。録音」「漁獲」「撰取」なんかの熟語なんかに使われるのだから大切です。「魚を獲る」は「捕る」か「取る」で代用可ですが、虫くらいならばともかく「しろくまをつかまえたるっ」みたいな大型なケモノになると、やっぱり「獲る」の「けものへん」をいかしたいところです。「取る」はもっとも多く使われるものです。「とる」というかんたんな書き取りは、ついつい、あれ？ どうだったかな、と思うもの。よごれを「トる」、連絡（れんらく）を「トる」、きげんを「トる」の三つはみんな「取る」でよいですよ。

「外す」。「外」は「そと」以外に「外す」で「はずす」と読みます。これも意外と入試ではドわすれしやすい、かんたんなのに正答率が低い漢字です。

「生える」も、かんたんな字ですよ。 「はえる」も書き取りによく出ます。

- ① 着物がハえるお母さん。

- ② 話がハえる。

①は「映える」。これは「ひきたつ」という意味があります。

②は「栄える」。これは「りっぱにみえる」という意味があります。

この二つは、書き取りよりも「読み」でよく出題されますよ。 「優勝に栄える」「栄えある受賞」など「さかえる」「さかえある」と読まないようにね。

「しりぞく」は「退く」ですが、常用外で「退く」は「ひく」とも使います。「兵を退く」と書いたら「兵をひく」と読むのです。前が「を」なら「ひく」と読んでください。 「が」なら「しりぞく」も「ひく」もどちらもいけません。

「あつく」は今回は「厚く」でした。「情」など「気持ち」は「厚い」「薄い」で説明します。「薄情なヤツ」という使い方はみなさんも知っていますよね。「厚情（こうじょう）」って言葉もあるんですよ。「おもいやり」という意味です。おとなはお礼のお手紙などに「ご厚情、感謝します」って、書くときあります。

さて、(2)は漢字のパズルですよ。クイズ番組でも最近をよくみかけるようになりました。慣れたらすぐにできるようになります。

- ① 指
- ② 手
- ③ 原
- ④ 朝
- ⑤ 質

前回は「貝」の話をしました。今回は「虫」の話もしておきましょう。いきなり、この二つの文字を合体させる。「蛭」です。なんて読むかわかりますか？ 「じみ」です。すいものやおみそしるに入れるとおいしい貝です。知りませんか？ じつはね、「虫」という字には誤解（ごかい）があるんですよ。みんな「むしへん」は虫に関係がある字、と思っいていませんか？ 「蛭」って、貝ですよ。 「虹」は「にじ」ですけど虫に関係あるのかな？ 理科で「融点（ゆうてん）」とか習いますか？ 「融」って虫と関係あるのでしょうか？ 「虫」という字は、じつは「生き物」すべてに使う字って知っていましたか？ みなさんの学校の係で「生き物係」ってありますか？ あれは「虫係」でも使えるのですよ。 おもしろいでしょ。「羽虫」と「毛虫」って、ついつい日本では、昆虫（こんちゅう）をイメージしてしまって、女の子は、きらしい、となりそうですよ。でも、漢字の世界では「羽虫」は「鳥」、 「毛虫」は「動物」を意味するのです。リスやハムスターはなんと「毛虫」です！ ちいさい「生き物」か、ゆらゆらぬるぬる動く「生き物」は、みんな「虫」という字で示すのですよ。 「蛭」は「ちいさい貝」という意味からつくられた字なんです。

むかしむかしの日本のお話の中で『堤中納言物語』って本があるんですが、その中で「虫愛（め）ずる姫」という話が出てきます。「虫が大好きな少女」って話です。平安時代の「虫」には、へびやトカゲもふくまれているのです。この少女は虫のほかにも、へびやトカゲが大好きだったんですね。今でも日本語にはそれはのこっていて「爬虫類（はちゅうるい）」って「虫」が入っているでしょう？ だからへびも「蛇」で「むしへん」です。

さてさて、「虹」ですが、あれは古代の中国では、「竜」が天を走ったあと、とされてきました。あれは竜なんです。だから「むしへん」が使われているのですよ。

「融」は、ものが「とける」という意味の言葉です。なんで「虫」なんででしょう…

「とける」もいろいろな漢字がありますよね。「解ける」「溶ける」がありますが、常用外で「融ける」があります。「溶ける」は「さんずいへん」ですから基本は「水にとける」ときに使用しています。「融ける」は「解ける」で代用しますが、ほんとうは「固体」が「液体」になるときに使うもの。「融」の左の文字は「鼎（かなえ）」という字です。これは金属をとかすときに使う器ですが… 固体が液体に「融ける」とき、ゆらゆらと蒸気がたちのぼるでしょう？ ああ「ゆらゆら」ゆらめいている「いきもの」のような動きを「虫」であらわしたのです。「かなえ」で固体がとけて「ゆらゆら」けむりがあがっている、が「融ける」なのですよ。

## 第十四章

慣用句やことわざの中に、「体の一部」がよく出てきます。ちょっとこれらについての話もしておきましょう。むろん、入試でも出てくるポイントもまとめていきますね。

まずは「口」「くち」「コウ」「ク」と読みます。意味はもちろんわかりますよね。ほかに「穴（あな）」という意味もあります。漢字の中に「口」はたくさん出てきますよね。助数詞（じすうし）っていう言葉、知っていますか？ものを数えるときにくっつく言葉です。一個、一匹、一台など…。「口」には、すごい特別な読み方があります。「ふり」です。「一口」と書いて、「ひとふり」。刀の数を数えるときに「ひとふり」「ふたふり」、「一口」「二口」と書くときがあるんですよ。もちろん「振（ふ）り」と書くときもあります。それから、「口」には「種類」という意味もあって、「別口で…」というような使い方を聞いたことはありませんか？ そーいや、もともとの口という意味とはちがうもの、けっこうたくさんあるんですよ。

助数詞でも、刀以外にも、「寄付は、一〇一〇〇〇円から」なんて使うときもあります。呼び出すときにも使います。これは口と関係ありそうですね。「口がかかる」「はたらき口」とか、口はほんとに使いみちが多いものです。

「右」という字。「口」があります。上のっかっている「ナ」という字は「手」なのです。「左」の「ナ」も「手」です。左の「ナ」はタテが長いのを知っていますか？これが「腕（うで）」。筆順はヨコ書いてからタテ。これは「エ」という台の上のっているモノを左手でつかもうとしている図なのです。「右」の「ナ」は右手で、だからヨコのほうが長いのです。筆順はタテ書いてからヨコ。腕は後に書くのです。口に食べ物を右手でもってきている図なのです。これから「右」という字を書くときは、筆順に気をつけるだけでなく、ヨコを少し長めに書いてあげてくださいね。

さて、「叶う」って、なんて読むか知っていますか？「かなう」です。夢（ゆめ）が「かなう」、の「叶う」です。これは「十」という漢数字が入っているでしょう？むかしの人にとって、「十」って、特別な数字なんです。ゼロが無い時代ですから、一から九が数字で、そこから先は、特別な世界でした。だから「十」っていうのは、「たくさん」「いっぱい」「いろいろなの」って意味にもふくらみました。「叶う」は「十人の人の口がそろう」つまり「いろいろな人の意見が一つに合う」、そこから「かなう」という意味になったのです。

そうそう、聖徳太子さんって、十人の言葉を聞き分けたって、いいですよ。あれも、いっせいに十人がしゃべったことを聞き分けた、というより、「いろいろな人の意見をとりまとめられた」と考えたほうが政治家としての聖徳太子のイメージにはびつたりな気がします。そういえば「和」という字にも「口」が入っています。しろくまは、聖徳太子さんの「十人の言葉を聞き分けた」という伝説については、もっとちがう意味を考えています。飛鳥時代は国際的な時代でした。中国や朝鮮、ひよっとしたらシルクロードを通じて、ペルシアの人なんかも日本にやってきたかもしれません。どうですか？ピンときませんか？中国語も、朝鮮語も、そしてペルシア語も、「十人」、つまり「いろいろな人々の言葉がわかった」と考えたほうが、国際的な飛鳥時代の聖徳太子さんの話にびつたりな気がします。

口の話からすっかりわき道にそれちゃいました。脱線（だっせん）ついでにいろいろ話しちゃいますね。十七条憲法って知ってますか？聖徳太子さんがつくられた「役人の心得」です。どうして「十七」あるか知ってますか？

一から九まで、陽数つまり奇数の最大は「九」、陰数つまり偶数の最大は「八」。陰陽を「和」して一つとする、九十八で十七条。いろいろな価値観をひとつにまとめましょう、という、ふか〜い意味がある数字なんです。社会の歴史が得意な人は、「御成敗式目」や「武家諸法度」という後の時代の法律を知っていますか？それぞれ何条あ

るか知っていますか？ 一度数えてみてください。二つとも「17の倍数」で構成されていますから。

ところで聖徳太子さんには、「耳」も登場します。聖徳太子さんは「豊聡耳の王子さま」ともいわれました。「耳がよい王子さま」って、やっぱり、外国語ペラペラって考えたほうがよいような気がします。

## 第十五章

今回は「目」についての話です。

目は「瞳」（ひとみ）をあらわした象形文字。ヨコむきにすればわかりますよね。読み方は「モク」「ボク」「め」「ま」です。目そのものの意味だけではありません。目で何かをする、「目礼」「目測」「みる」という意味で「目撃」「注目」「みこみ」という意味なら「目算」。あ、「目論見」は何て読むかわかりますか。「もくろみ」です。「ねらい」「めじるし」ならば「目的」「目標」。「いろいろ分ける」となると「目次」「項目」、「細目」は「ほそめ」って読んではいけないよ。「さいもく」です。「なまえ」なら「品目」もあります。どうです？ 「目」にはいろいろな意味があるでしょう？ 「だいたいな点」なら目を二つ重ねて「眼目」。「顔・すがた」ならば「面目」「真面目」。「真面目」は「まじめ」と読みます。「めぐりあわせ」なら「ひとい目にあつた」と使いますし、「すきま」ならば「目が細かい」と使います。「さかい」なら「節目」「折り目」などなど、いちいちあげていたらきりがない……

さて、「臣」という字です。え？ これって家来（けらい）って意味の字ですよ？ 目と何か関係あるの？ と、思う人もいるかも。よくみてください。「臣」は「目」の□の部分飛び出た図ってわかりませんか？ 目ん玉が飛び出るくらい、よく見る、という意味です。ですから、主人の目となって、よく見ます、ということから「家来」としての「臣」という字が生まれました。だから「臣」という字は、基本的に「目」と同じ、と考えたほうが漢字の意味はわかりやすくなる場合がほとんどです。

「見」という字は「目」に「ひとあし」がついています。「目十人」です。まるで、ゲゲゲの鬼太郎の目玉おやじみたいですが、「人が目をつかっているようす」から「見」がうまれました。ということは……「臨」という字、「臣」＋「人」＋「品」からできていることに気がつきませんか？ 「見」＋「品」なんです。目を大きく見開いた人が、品物を上からのぞきこんでいる字。「見」をヨコにして、「品」の上ののせて、目玉を飛び出すと「臨」という字になりますか？ だからこの字に「ものごとくのぞむ」という意味できたのです。

「目」よりもよく見ているのが「臣」です。とすると、「監」も、「よくく見ている人」が入っているのがわかりませんか？ 「臣」＋「人」＋「」＋「皿」。「皿」の上の「」を、目を見開いて、上からのぞきこんでいる、という字です。

さて、「臣」が「目」なら「民」はどうでしょう？

え？ 「民」も「目」に関係あるの？ これは実はちょっとこわい話です。むかしは、どれいとなった人たちはかたほうの目をつぶされました。目に針をつきさした字だって、わかりませんか？ 「目」に「」をつきさしてできたのが「民」……なんせ漢字はむかしむかしにつくられたもの……現代では、え……と思うような成り立ちのものもあります。

## 第十六章

体の一部の漢字の話をしてきました。さて、今回は「鼻」の話。

「自」という字は、「ジ」「みずから」と読みますよね。自分の自、です。いまでは、この意味のほうをよく使いますが、もともとは、この字こそ「鼻」を意味する漢字なんです。ほら、「わたし」とゆびさすときに、ひとさしゆびで、鼻をさすでしょう？ ここから、「自」（はな）に「じぶん・みずから」の意味ができるようになったのです。だから、「鼻」という字。「自」＋「犬」で、犬がくんくん鼻をきかせているようすから「におい」という意味になりました。あれ？？ しろくまさん、「鼻」は「自」＋「大」だよ……「」がないよ

と、みなさんに、怒られちゃいます……「犬」の「」が漢字として使われているうちに、はぶかれてしまったものなんです。もともとは犬という字でした。

それから「息」という字。よく、「心」は「きもち」をあらわす、と思ってしまいましたが、これも、「自」とよく似たいきさつがあって、じつは「心」は、心臓（しんぞう）の象形文字。ですから「心」には「むね」という意味のほうがもともと強いのです。「息」は「自」＋「心」、「むね」から「はな」にかけて、を意味して、胸から鼻へ出てくるもの、で、「息」（いき）になりました。

さて、つぎは「耳」です。「みみ」という訓読み、「ジ(チ)」という音読みがあります。

「聞」の部首は「門」(もんがまえ)じゃないよ、「耳」だよ、ということを以前に言いました。意味をあらわすのが部首なんですよ。でも、「耳」の音の「ジ(チ)」には、とける、くずれる、という意味があるのです。

しろくまが、子どものころ、「恥」という字は「みみへん」に「こころ」でしょうか？ はずかしいと耳が赤くなるやろ、心は耳に出るんやで、と、先生に言われて、あくそがかっ と、感心したことがあります。そんなふうな説明、聞いたことはありませんか？

子どもに、「わかりやすく」説明して、おぼえてもらおう、という先生の工夫(くふう)だったんですよ。「うそ」というより「おぼえてもらう」ための「くふう」だから、ゆるしてあげてね。「恥」は「心」(おね)が「耳」(ジ・チ)という音を出して、とける、つぶれる、というような気持ち、という意味から「はずかしい」という意味になった文字です。

「男」という字も、「田んぼで、力を出して働いているから男や」と説明されてしまいましたが、「男」は会意文字ではなく、形声文字です。「田」(だん)は「田」ではなく、「任」という字が変化したものです。「力」を「になう・出す」もの、ということから「男」という文字が生まれました。

「取」という字も、「耳」があります。「又」は「手」です。見かたによっては、おやゆびとひとさしゆびで、ものをつまむような形に見えなくもありませんよ。「耳」を「手」でつかんでいる、という字です。

「職」には「耳」が入っています。「識」は「言」ですが、右がわは同じ字が入っていて二つとも「シキ(シヨク)」という音をあらわしています。これは「おぼえる」という意味です。ですから職は「よく聞いておぼえる」という意味。役人は「人の話をよく聞くもの」というところから「職」になりましたし、遠くから、「聞こえたかあ〜」とききけんで「はい、聞こえました〜」と手をあげたり、旗(はた)をあげたりしたことだから、「はたをあげる」となって、商売をしています、と、お店に旗を出すところから、「職」に商家、という意味も生まれました、ともいわれています。

「聖」にも「耳」が使われています。「耳」+「呈」という字です。

「呈」は、「テイ(セイ)」は「まっすぐとおる」という音の意味があり、「神さまの声がまっすぐ聞こえる」ということからできた文字です。

「聡」という字、「さとし」というお名前にも使います。「総」の右と同じ字と「耳」ですが、この右がわの字は「ま」とめる「あつめる」という意味があります。「聡」という字は、「かしこい」という意味ですが、「よく聞いてまどめる」というところからできました。

ほんとうの「かしこい」というのは、むかしから「人の話をよく聞く」ということなんですよ。

みなさん、お父さんお母さんの話、まず、よく聞いていますか？ 聞いてその話をよく〜く頭の中でまどめてから、自分の考えを言わないといけませんよ〜塾でも、まず、しっかり先生の話の聞くっ！

「まず聞く」ことから「かしこい」は始まります。

## 第十七章

こんにちは、しろくまです。また、かんじの話をしますね。「トメ」「ハネ」の話をしていきたいと思います。

トメ、ハネ、というと、え、そんなん別にどうでもよいのとちがうん？ という人もいれば、トメるのかハネるのか、いつもどっちか迷ってしまって、トメてるよ〜な、ハネてるよ〜な、びみよ〜にごまかしちゃうっていう子もいますよ。

でも、入試で採点するのは国語の先生だから、わりとしっかり採点している学校もあるんだよ。トメもハネも漢字の大切な一部です。かってに変えちゃったらかわいそう。気になる子はけっこう気になって、あれこれ迷ってしまうので、今回、そんな「迷い」や「小さな心の負担」をしろくまが軽くしてあげるね。コツをつかむと、かんたんだよ。

(1) 小学校1年で習う字

まずは小1で習う漢字から。とくに低学年の人たちも今からしっかりやっているとテストでも自信をもって堂々と気持ちよく書き取りできるでしょ。わかっている人も確認しながら読んでいこう

まずは「原則」をおさえておくと楽だよ。

① 「人」はハライ、「にんべん(イ)」はトメる人という字は、ハライなんだ。でも「にんべん」のタテはしっかりトメるのをわすれずに。

だから「人」をふくむ字はみなハライでよいよ。「火」「犬」「大」「足」「天」「入」「八」

② 「木」はトメる。だから木は「へん」も「つくり」みんなトメる。「休」「林」「本」

③ 「十」はトメる。だから「十」をふくむ字はみんなトメるんだ。「車」「千」「早」「草」「中」「年」

さて、このあたりは基本編。ちょっと応用編にいきますね。

「雨」「円」「月」「青」はわかるかな？

④ 「かまえ」は右のタテをハネるんだよ。下につき出たタテは、2つとも、あるいは3つともハネるものはほとんどないんだよね。たいていは、ハネていないか右側だけがハネているよね。

⑤ 「ちょっと右にふくれたカーブのタテ」はハネる。「子」「丁」「手」「寸」。だから「竹」「村」なんかも右のタテはハネるんだよ。もちろんこれらをふくむものもハネます。(「たけかんむり」はハネないよ)「字」「町」

⑥ 「左にふくれたカーブ」はハネる。「花」「気」「九」「見」 (例外)「空」の「あなかんむり」はハネない！

⑦ これはハネる！「小」「水」「赤」はハネているよ！

⑧ これはハネない！「糸」「下」「耳」はハネていないよ！

一年生で習う漢字は全部で80字。そのうち、これらのトメハネを注意していればそれでOK！

⑦・⑧の6字はとくに大切！ なかでも「赤」「耳」は入試でもよく出題されるトメハネです。しっかりおぼえてね。

☆「赤」はハネるが「耳」はハネない！

(2) 小学校2年で習う漢字

小2で習う漢字は160字。小1の二倍の漢字を習うんだよ。

前回のポイントの①「にんべん(イ)」はハネないっというのをおぼえてくれるかな。小2は中学受験で出てくる書き取りの宝庫なんだよ。「遠」「園」の字に「イ」があるでしょう？ ここはハネてはいけないんだよ。よくハネる人がいるけど、入試で厳しい国語の先生だと×にされてしまうところ…

(例外)「衣」はハネるんだよね。よくにているけど注意！

ポイント②「木」はハネないっというのをおぼえているかな。だから「のぎへん」もハネないよ。「東」「米」「来」「楽」「体」「妹」、それに「科」なんかは小2で習う漢字だけれど、すべて「木」をふくむからハネないよ。

ポイント③「十」はハネない。「牛」「午」「計」「算」「茶」「半」「巾」という部分も「十」をふくむと考えてね。だから「帰」「市」「姉」はハネないでトメること。(例外)「才」はハネるよ！ 「寸」の仲間なんだ。

ポイント④「かまえ」は右のタテはハネる。

小2で習う漢字で、入試でもよく使われるものがここでたくさん出てくるからしっかり書けるようにね！

「巾」も「かまえ」だから右の部分はハネるよ。

「同」「角」「高」「用」「週」「晴」「朝」「明」「通」「内」「肉」「南」

もちろん「もんがまえ」もハネるんだよ。

「門」「聞」「聞」

ポイント⑤右カーブはハネる。⑥左カーブはハネる。

「丁」の部分はハネるんだ。「何」の「可」はハネるんだよ。おなじように「行」もハネます。

(例外)「近」の「斤」はハネないよ。「新」もトメてね。

「弟」のまんなかのタテはトメる。けれども右はハネる。「鳥」「馬」「鳴」などもハネる。「野」の「予」もハネるんだよ。もちろん「弓」もしっかりハネよう！ 「考」もハネています。

左カーブのハネはわりとわかっていてくれるよね。

「丸」「汽」「記」「兄」「元」「光」「色」「心」「思」「池」「地」「電」「売」「読」「風」「毛」などすべて小2で習う漢字。しっかりハネてね。

さてさて、小2ではポイント⑦とポイント⑧がたいへん重要！ 実際の入試でもよく出てくるので注意。

前回、「小」はハネるが「糸」はハネないっと言ったよね。この応用編が小2で出てきますよ！

☆「京」「原」は「小」と同じでハネる！

さて、今回、さらに2つのポイントを出しますよ。

ポイント⑨「カ」「刀」はハネる。

「カ」は小1で習う字だけれど、応用する字が小2で出てくるのでこっちにまわしました。

「方」「方」「分」「切」はハネよう！ ちなみに部首の「りっとう」は「刃」だからハネるんだよ。「前」の右下はハネる！

ポイント⑩「レ」はハネだ。

「食」「長」。「紙」の「氏」もしっかりハネよう！

さて、小1・小2の漢字からも入試問題は出されているよ。低学年だからってあなどってはいけないよ。

くしろくま問題！

次の①～⑦のカタカナを漢字にしよう！ トメハネもしっかりとだよ。

- ① 顔がアカらむ
  - ② 席をアける
  - ③ 不法入国者を本国へカエす
  - ④ 水泳の自由ガタで金メダルをとる
  - ⑤ まだ時間がハヤい
  - ⑥ マルい窓が見える
  - ⑦ 道がワかれる
- すべて実際の入試問題からの出題です。(ではまたね)

(前回からの続き)「トメ・ハネの話」

(3) 小学校3年で習う漢字

さて、前回までの①～⑩のポイントでもう、ほとんどトメ・ハネの判別はできるんだよ。あとは組み合わせやちょっとした応用。小3で習う漢字では、注意しなくてはならないものを個別に整理しておけばよいんだよ。

小3で習う漢字は200字。ポイントを応用させていくと…

応用は「くらべて」まとめるとわかりやすい。

ポイント③「十」はハネない。トメ。

「ふでづくり」はトメだけど…

☆「筆」(トメ) ⇨ 「事」(ハネ)

「事」の部首って知っている？ その名も「はねぼう」。ぜったいにハネてるよね。

☆「羊」(トメ) ⇨ 「様」(ハネ)

これは、ポイント⑦「水」はハネる、の応用でもあるんだよね。

小3ではこのポイントを使う漢字がよく出てきます。

「緑」「様」「球」「氷」「泳」はみんなハネるんだ。

さらにポイント⑦の「小」はハネる。

も「くらべて」おくれ。

「示」という字は小5で習うけど、ハネなんだ。でも「しめすへん」は「ネ」でハネないんだよ。逆に「手」はハネだけれど、「てへんに」になってもハネるんだよ。注意してね。

ちなみに小3で習う「てへん」の漢字は

「指」「持」「拾」「打」「投」

の五つだよ。しっかりハネよう！

☆「祭」(ハネ) ⇨ 「県」(トメ)

「県」の下はハネてはいけないんだ。

さて、小3で習う漢字でトメハネが大切なものはこれ！

☆「服」(ハネ) ⇨ 「板」「坂」(トメ)

☆「皮」(ハネ) ⇨ 「反」(トメ)

ちなみに、「皮」と「反」の1画めがちがうのを知っているかな？

「皮」は1画めはタテから、「反」の1画めはヨコからだよ。これは筆順の入試でもよく出ます。しっかりおぼえよう！ 「服」は「命」と同じで「ふしづくり(P)」が入っていて、これはヨコ→タテの筆順でハネるから注意してね。

タテはトメ、ヨコはハネだよ。

小3の漢字のトメハネで入試でも注意してほしいのは、

「筆」⇨「事」

「羊」⇨「様」



「祭」⇔「県」

「服」⇔「坂」「板」

「皮」⇔「反」

の5つ。こうやって対比でまとめておくとおぼえやすいよ。